

「観客なしでは演劇ではない」!

「早稲田サークル文化を盛り上げよう! 文連の会」通信 No.2

～文化の広場～



発行日: 2021年7月29日
代表: 神原 (教育・3年)
連絡先: 090-2331-4456

公演・企画等を「オンライン配信」のみとする学生部の制限をあらためさせ、

サークルの団結で「有観客公演」を実現しよう!

現在、大学当局・学生部は、サークルの公演・企画等を「オンライン配信」のみに限定しています。これに対して、多くの演劇サークル員は「演劇と映像配信はまったく違う」「映像配信では演劇の魅力は伝わらない」と声をあげています。学生部が「有観客公演」を制限し続けてきたため、昨年以降入会したサークル員は、観客の前で演じた経験がほとんどありません。スタッフワークの継承も滞っています。

このままでは早稲田演劇文化の伝統が途絶えかねません! 社会的には緊急事態宣言下でも、必要な感染対策を講じた上で「有観客公演」がおこなわれています。サークルだけが「有観客公演」を禁じられているのは納得がいきません。いまこそすべてのサークルは団結して、学生部の規制をあらためさせ、「有観客公演」の実現をかちとろうではありませんか!

ココがオカシイ! その1

社会的には「有観客公演」がおこなわれているのに、サークルだけが禁止!

大学当局・学生部は、サークルに対して「有観客公演」を禁じているが、学生部が参照を推奨している専門家のガイドラインでは…

来場者による大声での歓声、声援、唱和がないことを前提とする公演については必要となる感染防止対策を講じた上で、収容定員までの配席数**(収容率100%)**とすることが可能です

(公益社団法人全国公立文化施設協会
「劇場、音楽堂等における新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン改訂版」)



このガイドラインに基づいて、社会的には収容率100%の「有観客公演」がおこなわれている(緊急事態宣言下でも政府の基準では収容率50%以下の「有観客公演」が可能)

**なぜサークルだけ「有観客公演」禁止なのか分からない!
大学当局は必要な感染対策を講じた上で「有観客公演」を認めるべき!**

ココがオカシイ! その2

**大学当局のダブルスタンダード!
大隈講堂、小野講堂での「有観客公演」は外部団体はOK! サークルはダメ!!**

大学当局は大隈講堂、小野講堂の貸し出しをおこなっているが…

**外部団体のイベントは→収容定員の50%までOK
なのに!**

サークルのイベントは→オンライン配信のみ

**サークル=「感染源」と危険視する大学当局の偏見だ!
あからさまなサークル差別を許さない!**



ココがオカシイ! その3

早慶戦をはじめ体育部の大会は「有観客」なのに、サークルには認めない!

早稲田演劇文化を守り発展させるために、私たちは訴えます！

演劇と映像配信はまったく別物！

「オンライン配信」だけでは早稲田演劇文化の魅力は損なわれてしまう！

演劇は、演者と観客が同じ時間・場所を共有し、共感共苦することが最大の魅力であって、映像配信は演劇の代替物にはなりえないと、いま多くの演劇人がこぞって声を上げています。大学当局・学生部は、演劇人の声に耳を傾け、直ちにサークルに「有観客公演」を認めるべきです！

いま社会的に演劇を「不要不急」のものに見なす風潮があります。演劇がいまの社会に「不要不急」？ 断じて否だとすべての演劇人が声を大にして訴えています。むしろいまのような時代にこそ演劇は必要なのだと。

コロナ・パンデミックのなかで人々が分断され・孤立を余儀なくされているな

かだからこそ、劇場に集った人々が同じ時間・場所を共有し、喜びや悲しみを共にすることができる演劇は、いまの時代に絶対に必要です。ある演劇人は、かつてのナチスドイツのユダヤ人強制収容所でも、人々は決して歌い踊り演じることをやめず、そこから生きる力を湧き起こしていたことを想起したといいます。コロナ禍の困難な中でも演劇人はいま、新たな表現に挑戦し続けているのです。

すべての演劇サークル員は演劇人としての矜持にかけて、早稲田演劇文化の伝統をよりいっそう光り輝かせるために、なんとしても「有観客公演」の実現をかちとろうではありませんか！

演劇サークルの声

演劇はやっている人と見ている人がその場において、その場でしか得られないものを得るためにやっている。それが映像配信になったらテレビドラマと変わらない。画面越しに伝わるものを感じるというのは、もはや演劇とは別物。観客なしでは演劇ではない。

theatre(演劇)の語源はtheatron(見る場所)であり、芝生に人が居るから芝居が始まるのです。演劇が、時空を共有する観客の存在を前提にしているからこそ、我々は「演劇」をしたいのです。

演劇を映像にするなら、はっきりいって映画の方がカット数もとれていい。有観客にこだわり続けるのは、演劇の一回性があるから。このまま「有観客公演」ができないとスタッフワークの継承もできないし、新人公演すら客の前にたって演じることができない。早稲田演劇文化を途絶えさせたくない。

「オンライン配信」といっても映像の技術を持っている人は限られているので、そう簡単にはいかない。しかもこのままだと「有観客公演」の経験があるサークル員がどんどん少なくなってしまう。

早稲田OBの演劇人の声～白井晃さん(演出家・俳優)

劇場で観る作品に共感したり、感動したり、笑ったり、泣いたり、たとえ、その作品に嫌悪を感じたとしても、自分が時間を作って劇場まで足を運んで獲得した感覚は、PCの画面の中で感じるものとは大きく違うと思います。……また、表現者においても同じことが言えます。どんなに構想を練り、リハーサルを重ねたとしても、観客の前に立ち、その呼吸を感じることで自分の表現を高めることができます。……好意的な観客の空気ばかりでなく、批判的な空気を感じたとしても、客観的な観客の視線を糧に、表現は一気に膨らみ上昇します。（「論座」掲載の「日常を見直す。精神の『インフラ』である劇場から」より）

私たち早稲田のサークル員は、昨年来の大学当局・学生部による再三の学館閉鎖・対面でのサークル活動禁止措置を、その都度、文連のもとにサークルが団結することによってはねかえしてきました。現にいま私たちは、「緊急事態宣言」下でも対面でのサークル活動を継続しています。これもサークルの団結の成果なのです

いまこそすべての演劇サークルは団結して、学生部による「オンライン配信」限定措置を改めさせ、今夏・今秋こそ「有観客公演」の実現をかちとろう！ そのために「早稲田サークル文化を盛り上げよう！ 文連の会」のもとに結集して討論を積み重ね、学生部にたいする要求を練り上げていきましょう。

みなさんの声をお寄せください

